

幕末の長州藩、山尾庸三と長州ファイブ

1. 山尾氏の成り立ち

藤原氏の支族が宇都宮周辺に移住したのを端緒とする。その後、郷の名をとって八田氏または宍戸氏と名乗り、山尾郷に居住した宍戸氏の一族が山尾宍戸氏を名乗り、今の茨城県笠間市付近にあった山尾城を拠点としていたが、南北朝時代に北畠顕家に従って南下し、摂津にて室町幕府軍と戦い、敗北して良成親王とともに九州で南朝方として活動し、後大友氏に依った。その間三代が戦死し、後裔が大内義長に従い大内氏再興を旗印に毛利軍と戦ったが敗れて再び九州に落ち、豊前、唐津などに移動し、その後子孫は帰農して山口の宇部宇津木に居住し、さらに毛利氏の三白政策を受けて山口の秋穂長浜に移住して製塩業、農業に従事した。{山尾庸三傳 (1)}

2. 毛利藩の塩業・炭鉱経済圏の成立

瀬戸内では気候の関係より、古くから塩業があったが、毛利藩では7代重就から三白政策として、米、塩、紙を藩の重要産業としてその発展をはかる政策をとっていく。のちに蠟が加わる。

塩業は多くの雇人が働く労働集約的共同作業であり、また自然災害防止のための防潮堤の建設、浜を占有するための漁民との交渉、また瀬戸内全体としての生産の調整など他藩ともからむ交渉事もあるが、農業に比べてかなり収入の効率は良く、安定した明治以降であるが、一枚の塩田を持っていれば一町歩百姓以上の収入があったということである。{秋穂二島史 (2)}

また塩業は塩田の燃料として最初は木材を使用したが、安永のころより長州の藩内炭を使いはじめ、さらに燃焼効率の良い筑前炭を経て、筑前藩の他藩への搬出禁止に伴い、藩内炭あるいはほかの九州炭を併用し、さらに筑前藩の搬出解禁に伴い、藩内炭、九州炭の併用となる。{長州藩の経営管理 (3)}

石炭の輸送は主として船舶（石炭船）により行われ、筑前炭が搬出禁止になると三田尻（今の防府市）他の塩田業者は有帆（今の小野田市）に多くの人員を出して石炭掘りにあたらせた。それを塩田に運んだのは居能（宇部市）などの廻船業者である。

江戸時代の船旅は、下関から中関（三田尻）、三田尻から上関がそれぞれ一日の工程であり、夜間航海のない時代、それぞれの港町は大変繁盛した。

宇部の炭鉱には九州の炭鉱と異なる特色がある。九州の炭鉱は全国的な財閥所有の炭鉱が多いのに対して、宇部の炭鉱は資本は村民の共同出資（炭鉱株）で投資され、共同作業で稼働された。炭鉱株を持つ男性は坑内で働き、女性は

南蛮押し（後述）や坑外の石炭運びなどに従事し、炭鉱の責任者を頭取または社長といい、鉱夫と生活を共にした。このような村民の投資・株を集めて稼業する方法を「宇部式匿名組合」という。{図説宇部・小野田・美祢・厚狭の歴史(4)}

今ひとつ重要なことは、毛利藩において、塩業と蠟は毛利藩の特別会計である撫育方によって直営されたということである。

3. 撫育制度とは何か

これは長州ファイブ、ひいては幕末維新を成り立たせた要因の一つとして重要である。

撫育制度とは一種の特別会計制度であり、1763年の検地によって得られた収入を在来の会計と区分して別個に管理するようにしたものである。塩・蠟はこの撫育方により運営された。この撫育金は災害時に一般会計に流用されることもあったが、制度そのものは幕末まで運用された。

全体の金額は最初は4万石、さらに増殖されて6万石に達した。{長州藩財政史談(5)}。隣の津和野藩の石高が4万石ということを考えれば規模もわかる。

この資金は(1)港湾整備と商業振興、(2)新田と産業の開発、(3)幕府普請費用等にあてられ、毛利本藩内の港湾整備がされることによって(例えば下関は支藩領)、物産の流入、売りさばきがスムーズに行き、さらに港湾、軍事基地としての三田尻港も整備され、幕末に活躍することとなる。また港湾の整備、安全としての灯台の設置などは、廻船業のリスクを減じ、結果として藩の交易の活発化に寄与することになる。

幕末期となれば、京都周旋、軍艦建造・購入、朝廷献納、大砲、洋銃購入、維新出兵等の費用にあてられ、維新を大きく支えることとなる。なお最終的には100万両が残り、大蔵省におさめられる。(長州藩の経営管理)

なお私見ではあるが、一般会計から口出しできない特別会計、軍事費、藩主一人が裁定するシステムという制度は、なまじ成功したため、その後の日本の体制に根強く残り、今度は日本の体制を脅かすものとなる。(シベリアンコントロールなど)

4. 長州ファイブ結成の事情

この項に関しては、一次資料として、{「伊藤井上二元老直話 維新風雲録」(6)}がある。これは長州出身の維新の元勳である伊藤博文と井上馨から直接聞き取った実歴談の速記録を末松謙澄が編集して活字化したものである。

「洋行なされた時の顛末を」という末松の問いに対して伊藤は、井上(馨)と井上勝、遠藤謹助などが西洋に行くというので、自分もしきりに井上にす

められた。自分は（攘夷の）志士活動をしているので断ったが、さらに勧められて行く気になった。

当時江戸藩邸には古金で6、7万両あり（注）、留守居役と相談して、これで横浜に武器購入に行ったが、ろくなものはない。（藩元から）井上が出てきたが、300両しかもっていないので、大村益次郎と相談して、お金を担保に旧知の大黒屋から5,000両借りて旅費・滞在費にあてた旨語っている。「山尾庸三伝」の記述もおおむねこれによっている。不思議なのは、軽輩であるはずの伊藤が藩の大金の運用の相談にあずかったこと。山尾の名前が一度も出てきていないことである。

なお異説として風雲録では、佐藤貞次郎筆記として、重役の周布政之輔が極秘のうちに手配りをして、各国との交通が開けた時に生きた器械を買い入れるためとして派遣した。との記述がある。これは五人にとっては藩上部の話だが、こういう背景があれば、スムーズに進んだのではないかとはいえる。

また、頭山満他の「吉田松陰と長州五傑」(7)で、共著者の伊藤痴遊が事情を述べている個所がある。これを私が無視できないと思うのは、伊藤痴遊が井上の近くにいた人物で、あるいは井上から直接話を聞いた可能性があることである。

それによれば、若殿（敬親）から井上に洋行異国情視察ということで話があり、野村弥吉、山尾庸三、遠藤謹介をさそった。費用は一人200両ということで、計800両。これは若殿の手許金から支出された。山尾がイギリス事情通ということで伊藤をさそった。伊藤は横浜の商館のガウアーを知っており、渡航費・滞在費に計2,000両はかかるということがわかった。そこで留守居役の大村益次郎に頼んだところ、大村の英断で5,000両の貸借をすることができた。ということになっている。たかだか150年前のことでも調べると、真相をたどるのはなかなかむづかしい。ただ若殿の手許金にしても渡航・滞在費用にしても撫育金の存在があったから可能になった。というのは間違いない。

5. 藩の借入れ

撫育金に手をつけない。ということであれば、一般会計の欠損はやりくり算段の上は、借入れ、いわゆる大名貸しに頼ることになる。長州藩の経営は創設以来苦しく、諸経費の高騰が重なった天保2年(1831)には領内で大一揆がおきている。そのころの財政事情を見てみると、藩債は184万石、年収の6倍に達している。

ところで、今年の朝ドラに「あさが来た」があり、初めの部分で浅子が大名貸しの取り立てに苦労するという場面があったが、長州藩の幕末文久年間の大坂での借入れに関して面白いデータがある。借入れ分担を9人の豪商が分担

している。内訳は鴻池が2家、加島屋が3家、他鹽屋、高池、上田、広岡久右衛門だが、この広岡久右衛門は年代的に見て8代で、そうすると浅子の嫁ぎ先がこの次男。長州は勝ち組なので浅子が回収にいったことはなかっただろうが、想像は膨らむ。

いずれにしてもこの時代、維新前動乱期なので、撫育金だけでマイナス九万石となって取り崩しており、財政は四苦八苦したようである。(長州藩の経営管理)

6. 幕末藩政改革をもたらした背景

明治維新の原動力となったのは、長州、薩摩、土佐、肥前の各藩だが、これらの藩には大きな特色がある。

- (ア) 海に面して貿易港を持ち貿易で収入を得ることができたこと、
- (イ) 港を持ち、船を有して、国内のみならず海外の情報まで入手できたこと、また海防意識が育ったこと。これはとりあえずは攘夷の方向に向かうが、その後開国に修正されていく。
- (ウ) 米のほかにも例えば長州藩では、紙、塩、蠟、炭鉱、など他にも大きな財源をもっていたこと、
- (エ) 塩業では安永年間に生産過剰による不況克服のため、安芸、備後、伊予、周防の4か国で生産調整を行い不況を克服している。(今でいうカルテル)、貿易圏の成立とともに藩の枠を越えた共同作業が行われ、また各藩間でも交易が活発になってきたこと、
- (オ) そのことを背景に幕末に藩政改革を行い、それに成功して剰余金を得たことなどがあげられる。(薩摩藩改革も天保2年)

重要なことは藩政改革と並行して軍政改革が行われたことで、長州では身分の差がない奇兵隊など諸隊の誕生となり、装備は洋式を採用して総数は正規軍と諸隊合わせて4,000人を擁して幕府軍と戦った。(長州藩の経営管理)

7. 廻船業の発達、鉱業の技術革新

江戸中期以降においては、実用的な技術革新はそれぞれの分野でなされている。宇部の炭鉱に例を取れば、蒸杵と南蛮(なんば)の発明と使用がある。

炭鉱の安全にとって重要なことは、坑道の破壊防止と浸水の防止があるが、蒸杵は正六角形の杵で坑道を固めて漏水から坑道を守る装置、南蛮とは石炭や水をくみ上げる器械で、掘り進みに大いに役立った。蒸杵には漏水を防ぐ船大工の知恵が導入されている。なお、宇部地域は湧き水が多く、斜坑ではなく堅坑が使われた。明治中期には海の底を掘る大炭鉱(沖の山炭鉱、東見初炭鉱)が明治30年ころから創業された。大嶺炭田(美祢)では海軍の採掘も行われ、

海軍の最新技術が導入されている。「図説 宇部・小野田・美祢・厚狭の歴史」

また九州他の石炭を藩内や瀬戸内の塩田、京阪神の消費地に運び、帰りに米、芋などの食糧、木綿などを積んで運搬した廻船（石炭船）の活動も盛んになった。これは昭和まで運行され、秋穂長浜には塩田使用の石炭積み下ろし施設があった。この乗組員で秋穂が気に入り住み着いた人も何人かいる。廻船はまた、単に物資の運搬だけにとどまらず、動く情報機械、工場の側面を持ち、資本の蓄積にも寄与し、地域の豪商層の誕生に寄与している。維新の志士達を物心両面から援助した白石正一郎もその一人である。

8. 工部卿の役割とは

明治期の工部卿は伊藤→山尾と受け継がれていくが、これが日本資本主義の興隆に果たした役割を最後に見ていく。私は工部卿の役割は、少し前の文部、通産、科学技術、運輸、建設の各省分野を担い、工鉱業の発達、整備とそれを支える人材の育成に重点を置いたネットワークづくりにあると思う。

日本資本主義の明治期における立ち位置は、前述したように商品生産が各地で広範な展開を見せていて、しかし人材と資金、機械技術、輸送手段の欠如のため振るわない。という状況があり、そこを一時的に国家が経営に携わり、資金を使って、国情に適応した欧米の機械技術と人材を養成・導入し、更に民間に払い下げる。いわば国による民間資本の育成をすれば、後進資本主義としては十分やっていける。というようなものであったと思われる。

不利な点は重工業において相当立ち遅れていたこと、有利な点としてはアジアにライバルがいなかったことである。

そこで国家としては不平等条約の撤廃に取り組み、工部卿としては、まず全国の工鉱業の現状調査からはじまり、導入できる西欧の人材、技術の選定を行い、工鉱業の発展、また高度化、活性化をはかり、消費地への輸送手段を確保すること、いわばそのネットワークづくりがあげられる。

ただ問題はそれにとどまらず、そこを担う人材が必要で、最初はお雇い外国人から国内の人材の養成、大学の法学部、工学部、専門学校等の設置で、「為すの工業なくても」を解消していったわけである。ただし工部省、工部卿としては、インフラ整備が仕事のため、12年程度でその役割を終えることとなる。

*なお、これはまったくの余談だが、「風雲録」では伊藤が自身の言葉で、末松の問いに対して自分の攘夷志士活動について述べている。まず塙検校の暗殺については、塙が問題になった理由を述べているだけである。長井雅楽暗殺については久坂他6人で計画したが果たせなかったこと、井伊大老暗殺後の彦根に潜入したこと、ほかに異人を切ろうと計画したことなどを述べ、それ以降は洋行

となり、自分の立場も変わったので、攘夷志士活動は終わったことを淡々と語っている。

(注) 富成博氏 維新閑話 (8) に (長州藩のかくし財産) のいま一つは江戸麻布邸の穴倉貯蔵金である。1620年 (元和6) 年ごろに創出された。古金6万両、新金1万7、8千両をおさめ、そののちも、献上をうけた品や廃物の換金をためて、いっさい手をつけなかった。藩内でも数名の者しかこの秘密を知らなかったという。とある。伊藤の話はこの貯蔵金を指すのではないかと思われる。

引用・参考文献

- (1) 兼清正徳、山尾庸三傳、13、34-37、山尾庸三顕彰会
- (2) 吉松慶久、秋穂二島史、534、山口市二島公民館
- (3) 林三雄、長州藩の経営管理、63-64、67-69、215-216、219、263-267、287-293、文芸社
- (4) 山口県の歴史シリーズ、「図説 宇部・小野田・美祢・厚狭の歴史」130、134、166、174、郷土出版社
- (5) 兼重慎一談話 長州藩財政史談、82-84、142、マツノ書店
- (6) 伊藤井上二元老直話維新風雲録、9-19、28-32、35-36、マツノ書店、
- (7) 頭山満他、吉田松陰と長州五傑、176-199、図書刊行会
- (8) 富成博、維新閑話、212、長周新聞社

* 西欧の科学技術の発達については、山本義隆「磁力と重力の発見」「16世紀文化革命」にくわしい。

山 尾 正 雄